



かんき しょう
《歡喜への頌》

67年前の楽譜

加藤良一 令和4年(2022) 9月22日

手元の古い《第九》の楽譜の奥付けを見ると、昭和30年(1955)12月10日、太陽音楽出版社発行『歡喜への頌』とあります。かなり前に古書店で求めたもの、褐色にヤケ、シミも目立っています。最初の頁に下記のような鉛筆のメモ書きが残されていました。

30年12月28日(水)9時15分より

N響

指揮 エッシェバツハ

合唱 国立合唱団(高等)



元の持ち主は、国立音楽高等学校の学生のようなです。この高校はおそらく昭和24年(1949)に設立された、現在の国立音楽大学附属音楽高等学校かと思われます。このメモ以外に楽譜には一切書き込みがなく、きれいな状態でした。

ところで、「30年12月28日(水)9時15分より」とは、演奏した日時を指すのでしょうか。それにしても、朝の9時15分から開演とはいかにも早すぎますし、夜なのではないでしょうか。あるいは練習の初日のことかもしれません。そうだとすると、楽譜が発行されてから18日しか経っていません。驚異的な仕上がりとなります。

Letzter Satz
der Neunten Symphonie mit dem Schlusschor
über Schiller's Ode „An die Freude“

L. van Beethoven, Op. 125

Presto. (♩. = 96.)

Volles Orch.
ff

Pianoforte.

第九交響曲終曲合唱（ピアノ附）楽付

昭和三十年十二月五日印刷
 昭和三十年十二月十日発行

編集者 太陽音楽出版社
 編集部

定価百五十円

発行所 東京都港区芝三田豊岡町十八番地
 太陽音楽出版社
 振替口座東京三〇九一番
 電話三田(4)〇七三六番

楽譜の解説には次のように書かれています。解説者は不明です。

作品一二五。^(マ)に短調。プロシヤ國王フリードリヒ ヴィルヘルム三世に捧呈。此の曲の表題には(シルラーの『歡喜への頌』による終末合唱を有する交響曲)と記してあり、通稱、コーラルシンフォニーと呼ぶベートーヴェンの最後の最大の交響曲である。

ベートーヴェンは晩年全く聾になり、債務が彼を苦しめた。其上無頼な甥が彼を悩ました。而も其一八二四年、彼は起つて朗らかに『歡喜への頌歌』を歌つた『苦惱を経たる歡喜』を、彼は永遠の音に現はした。實に人の世の奇蹟。…

初演は一八二四年五月七日、金曜日午後七時、ケルトナートーア劇場で行はれた。…劇場は満員で、ベートーヴェンの知友は殆ど集まった。たゞ皇帝も皇后もルドルフ大公も旅行中であつた爲空いて居た。演奏は拙かつたが、歌ひ手はベートーヴェンの聾を利用したのだ一喝采は巨大なものであつた。… ベートーヴェンが一向喝采を知らずに居たので、アルトのウンガー嬢が袖をひいて聴衆の喝采を見せたら、彼は初めて氣が付いて聴衆に向ひ、靜に答禮したと云う有名な逸話が残っている。…

此の曲の日本に於ける初演は大正十三年十二月六日、東京音楽學校に於てクローン氏指揮の下に、長坂、曾我部兩嬢、澤崎、船橋の諸氏を獨唱者として行はれたが、此の演奏と共に、田村寛貞氏譯著『ベートーヴェンの第九ジムフォニー』が出版された事も記憶せらるべきである。

練習番号が現在より倍以上多い！

合唱部分の練習番号が現在市販されている楽譜とは異なっています。原典が明記されておらず、小節番号も振られていません。

『歡喜への頌』では、バリトンソロに続いて合唱が“Freude”と歌い始める237小節から【A】が始まります。ところが、現在の「Breitkopf版」(株)ショパン1994)では、それより97小節も前から【A】に入ります。これはどういうことなのでしょう。

237小節からいきなり合唱を始めるのではなく、その前から音楽に入り込んで、気持ちを高めて歌えということなのでしょう。

両者の練習番号は最初からずれていますので、いわゆる「歡喜の歌」といわれる練習番号【M】は「Breitkopf版」では543小節からですが、『歡喜への頌』ではそれが【L】となっており、559小節の“Deine Zauber binden wieder,”からが【M】です。

練習番号はベートーヴェンによるものではなく、あくまでのちに便宜的に付けられたはずですので、このように解釈によって変わるものなのかもしれません。

『歡喜への頌』は、【A】～【Z】に続き、【Aa】～【Tt】と合せて44箇所^{箇所}に細分化されています。ただし、【J】および【Jj】は欠番となっています。いっぽう、「Breitkopf版」は【A】～【T】の19箇所のみで、こちらと同じく【J】がありません。一説では【I】と混同するので【J】を使わないという理由のようですが、真偽のほどはわかりません。

この解説文で気になるのは、「日本に於ける初演は大正十三年十二月六日、東京音楽學校に於て」と書かれていることです。

日本で最初の《第九》は、大正7年(1918)6月1日、徳島県板東町(現・鳴門市)の板東俘虜收容所^{ふりよ}でドイツ兵捕虜が演奏したとされているので、「日本に於ける初演」とは正しくは「日本人による」というべきところでしょうか。

※ 頌とは、人の徳や物の美などをほめたたえること。また、ほめたたえた言葉や詩文。

[Back](#)

[音楽・合唱コーナーTOPへ](#)

[Home](#)

[HOME PAGEへ](#)